

小物

夫れ、轉中の萬物は日影を以て天地と爲す。持中の萬物は水燥を以て天地と爲す。轉中に居るを以て、天物は常に動く。持中に居るを以て、地物は常に止る。是の故に、日月は水火を天に於て爲す。迸りて散ずる者は、易にして星漢なり。明を發して東行に勝る。會にして月辰なり。暗を含んで運行に勝る。水燥は天地を地に於て爲す。分れて散ずる者は、上にして雲雨なり。清を以て堅動を爲す。下にして動植なり。濁を以て横動を爲す。

蓋し、天物なる者は箇箇圓成なり。易象は影に居りて光を發し、會象は景に居りて光を受く。易象なる者は星漢にして、東運は至つて微なり。轉と伴うが如し。會象なる者は辰沫にして、東運は甚だ速きなり。遲速留退す。

地物なる者は箇箇異形なり。易質なる者は天に在りて清を爲し、會質なる者は地に在りて濁を爲す。易質なる者は雲雨なり。升降 最も著るし。横旋は客氣なり。會質なる者は動植なり。横堅 最も著るし。升降は客氣なり。

蓋し、天なる者は、杳渺にして測驗に闕くる有り。地なる者は、撫摩にして交接に熟する有り。故に、其の説や、天を略し地を悉す。蓋し、大は轉持覆載有り。此れも亦た風恬水陸有り。風恬水陸は天地を開く。而して雲雷雨雪は象質を爲す。網縷摩盪して、物は其の間に化す。物の其の間に化するは、其の體を毎換し、成敗を以て鮮腐を爲す。

蓋し、小なる者は居りて資る。大なる者は容れて給す。是に於て、轉は則ち理を規矩に於て成し、持は則ち理を横堅に於て成す。此に理を資るを以て、而して恬は立ちて風は旋る。山は峙して海は俯す。是の故に物の其の間に成るや、横堅大小、變化は盡きず。神爲の妙と雖も、亦た資給の中に居る。是を以て、風恬水陸の間、上は雲雨有り。下は動植有り。動は偏に神を専らにす。植は偏に本を専らにす。故に、動は則ち質を以て動す。神を以て營す。故に其の體は則ち温かし。其の神は則ち意を爲す。植は則ち質を以て止り、本を以て運す。故に其の體は則ち冷たし。其の神は則ち意を没す。動は則ち内を虚にして天中に横行し、植は則ち内を實して、地中に堅立す。生に動植有り。類を堅輓に剖き、處を水燥に分つ。故に植は則ち堅植輓植なり。動は則ち堅動輓動なり。而して、水陸

相い有れば、則ち其の數は相い乗す。堅植は則ち土石なり。土は鹵を發し、石は金を收む。堅動は則ち介甲なり。甲は龜蟹を分ち、介は螺蛤を分つ。軟植は則ち、陸にして艸木、水にして藻樹なり。軟動は則ち、陸にして鳥獸、水にして魚龍なり。軟は則ち氣に勝り、堅は則ち質に勝る。大物は、氣を外にして質を内にす。故に内は土石を以て固く、外は運轉を以て保す。小物は、質を外にして氣を内にす。故に、外は皮肉を以て固く、内は營衛を以て保す。土氣は表に解くる。故に氣物、發生に饒かなり。石質は下に結ぶ。故に質物は収凝に成る。天物は景影に居り、地物は水燥に居る。動植の生、堅軟の類、水燥は相い隔つと雖も、亦た各有り。各有りと雖も、富乏無きこと能わざるなり。

動植は各堅軟有り。而して又た水燥有り。是を以て、軟生は、水陸各富み、剛生は、水陸偏りて富む。水陸の動植は、各二つなり。鳥獸なり。魚龍なり。艸木なり。藻樹なり。堅動は二つなり。螺蛤なり。龜蟹なり。水に富む。堅植は二つなり。土鹵なり。金石なり。陸に富む。

蓋し天地轉持の體は、虚實剛柔を爲す。風恬水燥の形は、以て横堅俯立を爲す。

水なる者は横質なり。氣は下に鬱して、而して水は上に和す。山なる者は堅質なり。燥は下に煦して、而して氣は上に達す。氣は下に鬱す。故に其の植は鮮少なり。水は上に和す。故に其の動は蕃滋なり。燥は下に和す。故に其の植は衆多なり。氣は上に達す。故に其の動は鮮少なり。是の故に、動は水に多し。而して燥に少し。植は燥に多し。而して水に少し。水物は吐納を以て息を爲す。陸物は噓噏を以て息を爲す。鳥獸艸木は、堅中に在りて而して其の體は立つ。魚龍藻樹は、横中に在りて而して其の體は俯す。然り而して、動行は迂曲なり。堅立は邪長なり。動なれば則ち其の體は横俯す。植なれば則ち其の體は堅立す。而して、其の中も又た各俯立して相い偶す。細かに其の錯綜する所を觀れば、則ち水動の伏は、伏して潛むと雖も、而も寝る無し。時有りて跳躍す。燥動の立は、立ちて行くと雖も、而も寝る有り。時有りて坐す。鳥は横に翔びて堅に寐る。獸は堅に行きて

横に寝る。且つ、鳥は天氣に資ること多し。故に羽輕くして飛ぶ。飲むこと少くして尿せず。獸は地氣に資ること多し。故に質重くして走る。飲むこと多くして尿す。魚は虚氣を受くること多し。水に因りて息を爲す。龜は實氣を受くること多し。氣を閉じて潛む。

動植は地を發して天に居し、土石は氣を結んで地に凝す。故に動植は虚質なり。土石は實質なり。

天なる者は虚動なり。故に物を没す。地なる者は實靜なり。故に物を露す。物を没するの故に、之を虚と謂う。

物を露するの故に、之を實と謂う。故に、地體なる者は實露なり。以て土石を爲す。石は地に於る骨なり。土は

地に於る肉なり。土石は則ち實止の體なり。虚動と對して天地を爲す者なり。而して土石と謂うは、以て動植の

中に堅軟の一種を爲す者なり。何ぞや。土石は固に地體の堅軟なり。然れども持中は、虚質を地表に聚む。實質

を地中に結ぶ。地體の上石を爲すや、生化は跡を没し、虚動の攸遠を爲すと伍するなり。故に其の物は精華を發

し、而して地面に凝結し、以て解結の跡を爲す。彼の生化の跡を没する者と異なるなり。解結は已に跡を爲す。

生物に非ずして何ぞや。此の故に、土は鹵を發し、石は金を収む。故に骨肉を爲す者は根幹なり。解結に跡無し。

金石土鹵なる者は、其の華實、以て解結を露す。土鹵は未だ形を成さず。金石は已に質を結ぶ。蓋し地中の物を

爲すは、水火なり。水火は含易を有す。土鹵も亦た含易を有す。易土は火を得て燃ゆ。含土は水を得て親しむ。

故に、鹽は礪礪の鹵を消し、鹹自り結ぶ。硫は硝腦の鹵を礬し、膩自り結ぶ。金鐵は火を見て融け、玉石は火を

見て碎ければ、則ち此れも亦た土と性を同じくするや觀る可し。堅軟の生は、均しく是れ生化すと雖も、艸木能

く生じ、金石能く結ぶ。氣の結ぶ所は、則ち能く石質を爲す。亦た虚實を隔てず。故に、或は以て天中に結び、

或は以て雷中に結ぶ。知らざる者は謂う。氣は沙土を擁し、天間に鑄冶すと。或は、隕て石を爲す者は、乃ち天

上の星なりと謂う。是れ皆な人工を以て天を窺うなり。此の故に鍾乳浮石は、水の結なり。玄精凝水は、鹹の結

なり。詎んぞ彼の土石を用いん。陶冶して而して後、結んで成らん。楠樞は木自りして結ぶ。牛黄狗寶、自ら病

みて結ぶ。今、蜂蟻の琥珀に居る。華葉の石中に生ず。空青禹糧は水自り質を結べば、則ち結の跡 繹ぬ可きなり。結の堅にして麓なる者は、乃ち石と爲す。石は麓密を分ちて、石と爲し玉と爲す。結の軟にして精なる者は、乃ち金を爲す。金は堅軟を分ちて、金と爲し鐵と爲す。銀朱胡粉は、金の火化に由て鹵を爲すなり。磁器陶瓦は、土の人工に由て石を爲すなり。焼灰は、木の火化に由て鹵を爲すなり。乳香乾漆は、液の風化を経て塊を爲すなり。石なる者は麓體なり。金なる者は精體なり。丹緑垢磁は金にして麓なり。水晶寶石、瑪瑙臘石は、石にして精なり。滑石石脂は鹵に幾し。聖緒、石灰、黒土は、土に幾し。土の、植は黏にして堅、墳は脆にして軟、石は堅にして脆、金は軟にして黏なり。至軟の極は、水銀に至る。至堅の極は、金剛に至る。地なる者は、塊然として中處す。土石は植に漸んで、未だ地體を離れず。故に其の形を塊然にして、未だ之を歧に開かず。石は已に定體を爲す。而して未だ定形を爲すを離れず。已に定形有らず。則ち他と寓似せざることを能わず。故に、石にして理形の變を極む。是を以て、石理は、或は日月山川を爲す。或は艸木鳥獸を爲す。石形は、天工の萬品に肖る。又た人工の器械に狀す。是れ乃ち石の體なり。蓋し堅軟の動植は、動 有意を爲し、植は無意を爲す。軟體は以て形を歧し、堅體は以て形を塊す。堅植は金石土鹵なり。軟植は艸木藻樹なり。軟動は鳥獸魚龍なり。堅動は螺蛤龜蟹なり。軟生は肉を主とし、堅生は骨を主とす。螺蛤は最も塊然たり。變は則ち貝蝮等の形を爲す。龜蟹は亦た能く塊然たり。蟹蝦は則ち漸く其の形を開く。動植は、水陸に 各 居りて、而して堅動は水を親しむ。堅植は燥を親しむ。動の堅軟は、則ち骨肉迭に内外す。植の堅軟は、則ち枝幹相い有無す。而して水は堅植無きに非ず。珊瑚樹、石闌干、枝幹存して華葉無し。陸は堅動無きに非ず。石螺、石蛤、形體具して精神無し。堅植は、形を開きて柔植に漸めば、則ち珊瑚樹、石闌干なり。堅動は、神を捨てて堅植に漸めば、則ち石螺石蛤なり。且つ聞くに、石植の華を開く者、大螺の山に在る者有れば、則ち水陸も亦た 各 相い雜す。然りと雖も、彼は之を常とし、此は之を變とす。條理の道、分るれば則ち粲然として類を隔つ。合すれば則ち混然として物を通ず。

故に、一動一植は、陸に居し水に居す。物の分るる所なり。水陸動植は、或は漸み或は合す。物の合する所なり。故に、品類を以て、而して其の擾擾を理す。漸合を以て、而して其の統を觀る。

天地の具する所は、萬物は茲に資る。資れば則ち之を全にすること有るが如しと雖も、剖けば則ち之を偏にする所有り。相い反し、相い應じ、相い之き、相い漸む。本生有り。餘生有り。天地を同くする有り。天地を別にする有り。細かに神爲の妙を悉す。故に動植は、其の形を塊歧にし、其の物を横豎にし、其の體を虚實にし、其の氣を溫冷にす。本末は彼此を異にし、神本は相い長短す。緯偶に牝牡華實有り。經繼に子母子苗有り。鳥獸は類を横豎に分ち、艸木は類を小大に分つ。小輦大堅、横重豎輕、鳥豎獸横、艸小木大、大分有りと雖も、錯雜 還つて相い結ぶ。故に獸の類は、豎は人寓を分ち、横は猫狗を分つ。大は牛馬を分ち、小は貂鼠を分つ。鳥の類は、豎は鶴鷺を分ち、横は鷹鷂を分つ。大は鷄雉を分ち、小は鳩雀を分つ。陸生は文に富み、水生は文に乏し。文に富むを以て、而して鳥獸は猶お陸を以て水に漸むがごとし。

横豎の間、豎に人寓有り。横に虎馱有り。人に人猿の類有り。寓に猿猴の屬有り。而して、此れ重に彼れ輕なり。此れ穎に彼れ愚なり。虎に虎豹の別有り。馱に牛馬の分有り。而して一重一輕なり。輕き者は猛し。重き者は力す。人類なる者は、倮體穎性にして、而して技は智巧に在るなり。寓類なる者は、被毛性黠にして、而して技は輕捷に在るなり。虎類なる者は、肢指に技有り。猛にして利觜尖爪有り。馱類なる者は、蹄を以て爪に代う。強にして牙を含み角を戴く。虎豹、豺狼、熊羆、貓犬、狐狸は、虎の類なり。牛馬、牝驢、挈駱、猪鹿、羊豕は、馱の類なり。此れ之を大と爲す。而して亦た小類有り。其の大なる者を兎蹶の類と爲す。貂鼪より、鼯鼠に至りて漸く小なり。鳥の豎なる者は、鶴鷺なり。鷺鷥と偶す。鷹鶚鳥梟は、猶お獸に虎類有るがごとし。以て利觜尖爪を具す。鷄雉鷺鳳は、猶お獸に馱類有るがごとし。以て大觜長距を具す。此れ之を大と爲す。而して亦た自ら小類有り。其の大なる者を鳩鴿の類と爲し、小なる者を燕雀の屬と爲す。獸の水に漸む。海人川童、水豹臘虎、

海驢海牛、水鼠海鼠、皆な陸形に従う。鳥は最も水に漸むに於て富む。長鷄短尾、矮脚にして蹠、稍や異類の如しと雖も、而も近似する所有り。故に鵝は好んで蟲多を食し、夜鳴更に應ず。鷺は能く鶏と相い群して、卵、鶏伏を假れば、則ち其の性は鶏と遠からざるなり。是を以て、鳧雁の遠翔、亦た能く地に居す。漫畫の重身、鴛鴦の文彩、類は愈いよ鶏に近し。而して鷓鴣の鷺に近く、海鳥の鳥に近く、海雀の雀に類する、漸水の間にも、亦た自から大小横豎の類有り。浮を以てする者は、立を用いず。魚を食する者は猛を用いず。故に其の類は微なり。是を以て鷺鷓魚鷹の類は、陸形を以て水に居る。

文に乏しきを以て、而して水生は惟だ魚龍有り。魚は塊にして龍は歧す。之を玩べば則ち鱗保龍鱧に分る。

鱗鬣を以て遊ぶ者は水の鳥と爲す。故に鱗保を統べて皆な魚なり。手脚を具して潜む者は水の獸と爲す。故に龍鱧を統べて皆な龍なり。是に於てか、鳥獸は、各鱗保を有すなり。其の間は大小強弱と、微鱗巨鱗の異有りと雖も、皆な其の體は豎にして、而して鱗を出でざるなり。其の手脚を生ずるや、鼃と爲し、鯪鯉と爲す。皆な龍類なり。保は則ち、海鷓の扁、河豚の圓、杜父の小、海鱈の大、鰻鱺の長、鮫の痲痛、形狀は同じからずと雖も、而も其の體は横なり。而して保に外ならず。而して其の手脚を生ずるや、鱧と爲し、鯪と爲す。皆な鱧類なり。鱗の有無を以て之を分てば、鱗一、保一なり。手足の有無を以て之を分てば、魚一、龍一なり。凡そ鱗なる者は卵生なり。保なる者は胎生なり。鱗の鱗を没するは、猶お微鱗の玉屑の如くなる有り。保の皮を固くする。終に堅沙の痲癩を爲す有り。

而して鱗保龍鱧は螺蛤龜蟹に併せて合して鱗甲の二種を爲すなり。艸小木大、鳥豎獸横、大分有りと雖も、錯雜は還つて相い結ぶ。故に植の類は、豎に筍竹有り。横に藤蔓有り。木に喬矮有り。艸に豊細有り。陸中は植に富み、水中は植に乏し。植に富むを以て、而して艸木は猶お陸を以て水に漸む。

動は能く類を隔ち、植は能く類を雜う。隔てば則ち混ぜず。雜れば則ち相い淆す。是を以て、横豎大小、筍蔓卉

樹を分つ。卉樹は艸木の正なり。筍蔓は艸木の變なり。筍なる者は豎なり。蔓なる者は横なり。卉なる者は小なり。樹なる者は大なり。而して筍蔓なる者は、艸木各其の中に在り。卉樹なる者は、其の中、各艸木を有す。類の雜る所なり。是を以て、豎は筍を爲し、横は蔓を爲す。筍なる者は豎なり。直にして曲ること能わず。蔓なる者は横なり。依りて、立つこと能わず。艸木の種子は、其の芽を生ずるに皆な下に向う。而して筍類の種子は、其の芽を生ずるに皆な上に向う。直圓の道を分資する有るに似る。且つ柔生、皆な皮を以て肉を覆う。惟だ、筍は皮を以て筍を爲し、筍を脱して體を露す。木を爲せば、則ち虚は竹を爲す。實は椶櫚と爲る。艸を爲せば、則ち子を結んで牟麥稻粱と爲る。華を吐して茅苳菰蒲を爲す。葱茗の葉を茎にする。木賊燈艸の茎を葉にする。水仙燕子の葉を重ぬる。蘭と爲り、薑と爲り、菖蒲と爲り、萬年青と爲る。皆な筍の變を極むるなり。而して、水に漸めば、則ち萱と爲り、荻と爲る。皆な豎理を具して而して横文無し。蔓なる者は横植なり。蔓にして艸、之を蔓と謂う。蔓にして木、之を藤と謂う。同じく是れ豆と雖も、而も莢葛は藤蔓を分つ。同じく是れ藜と雖も、而も黃瓜、錦荔枝、葡萄、蓂蓂は、藤蔓を分つ。同じく根を豊かにすと雖も而も菝葜仙糧、薯蕷葶藶は、藤蔓の殊なり。是に於て、或いは相い有無し、或いは相い比類す。弱の變化を盡くすなり。而して水に漸めば、則ち蓴と爲り、菱と爲る。世は生の藤蔓を分たず。概して之を蔓と爲る。筍の艸木を分たず。之を艸木に於て疑う。樹は枝葉根幹の條理に正しく、卉は枝葉根幹の條理に混ず。而して木なる者は剛大なり。氷雪を互りて久を保つ。艸なる者は柔小なり。春秋を逐いて相い換る。故に、華蓋を以て幹を爲す。鷄冠米囊の如き者有り。根を豊して肉を爲す。萊菔蹲鴟の如き者有り。根を以て幹と爲る。款冬芙蕖の如き者有り。枝を以て幹と爲る。紫葍、鳳尾の如き者有り。野蒜は子を葉頭に結ぶ。藁荷は華を茎外に發す。皆な樹の條理に異なるなり。其の類の雜なる者は蠶豆、豇豆の、豎を爲し蔓を爲し、蒴蒴接骨の、木を爲し艸を爲すが如き類なり。枸杞、懸鉤の屬は、樹中に卉し、牡丹、棗棠の類は卉中に樹す。樹は水に在れば、則ち質を變じて火樹、海松を爲す。卉は水に在れば、

則ち形を變じて藻蘊を爲す。水は動物に富む。故に動は變を水に於て極む。陸は植物に富む。故に植は變を陸に於て極む。故に海動は、一胎數萬なり。猶お植實のごときなり。是に於て、手有り足無きこと、彈塗の如く、左右を以て腹背と爲ること、比目の如く、身を倒にすること章魚の如し。骨を外にすること龜の如し。文を没すること螺蚌の如し。物に著ること牡蛎の如し。毬を爲すこと海膽の如し。塊然たること水母の如し。頑然たること海參の如し。皆な陸變の有せざる所なり。

植に乏しきを以て、而して水生に惟だ藻樹有り。藻は横にして樹は豎なり。之を玩べば則ち筵蔓卉樹に分る。筵蔓卉樹と金石土鹵と、望んで堅軟の二種を爲す。

根を水底に託すと雖も、而も華葉の水上に在る者は、陸漸の種にして、而して水植に非ず。全體を水に潛め、根を沙石に託する者にして、而して乃ち水植なり。陸植は土に著きて生じ、水植は石に著きて生ず。藻は則ち柔軟なり。樹は則ち堅剛なり。故に藻は則ち水中の艸なり。神馬は蔓の如し。菅藻は筵の如し。昆布は蒿苳に類す。

黒目は蔓菁の如し。海松は即ち松なり。珊瑚樹の如き、石闌十の如き、屈曲錚錚、華葉を閉ず。夫の蒙茸の海蘿、陟釐、鷄冠、鹿尾の如き、則ち餘生は苔を爲す。苔は則ち水に専らにして、而して能く陸に至る。菌は則ち陸に専らにして、而して能く水に至る。水底石間、菌を生ず。髣髴として陸産の如し。石面水際、苔を有す。依稀として水産に似る。

乏しと雖も、鱗介も亦た陸に漸む。

鱗中の魚龍は、陸漸すれば則ち蛇と爲り、蟒と爲り、蜥蜴と爲り、守宮と爲る。倮中の魚龍は、陸漸すれば、則ち鯢と爲り、鼈と爲り、蚯蚓と爲り、蚰蜒と爲る。甲は則ち龜蟹、或いは山棲す。介は則ち蝸牛夜啼、或いは陸處す。

藻苔も亦た陸に漸む。

藻苔も亦た陸に漸む。

松は 女蘿 有り。薔は 垣衣 有り。乾處は乾にして苔を生じ、溼處は溼にして苔を生ず。

然り而して、陸は植の變を極め、水は動の變を極む。是を以て、水陸動植、類を分つ可し。而して種は自から無窮なり。生氣は此に於て盡きず。蓋し、動は蟲多有り。植は苔菌有り。蟲は以て飛び、多は以て行く。苔は以て歧し、菌は以て塊す。物剖くれば則ち天地剖く。天地の多は、物類の滋き所なり。

禽獸は、我と天地を同じくす。而して體を異にし氣を類す。艸木は、我と天地を同じくす。而して體を反し氣を反す。然り而して、魚龍藻樹と禽獸艸木は、天地反すと雖も、而も體類相い比す。餘生の動植は、蟲多なり、苔菌なり。蓋し、天地の物を生じて、物又た天地を成す。天地並び立ちて、彼此同じからず。餘生の動植は、多く

各の天地に生ず。天地 各なれば、則ち生も亦た異類なり。故に蛭蟻蛙螢、泥壤に依る。蚊蚋蜂蠅、艸莽に依る。蠹は器物を天地とし、蟬は衣帛を天地とす。菌は朽質を天地とす。黴は溼體を天地とし、毛髮は獸身を天地とす。羽翮は禽身を大地とす。羽毛は動の植なり。華葉は植の植なり。虻は動の動なり。蝸蛄は植の動なり。故に、瓜の天地無ければ、則ち 蠶 無し。苗の天地無ければ、則ち 蝨 無し。豈に其の物を天地とせずして生ずと曰うを得んや。大地は愈よ多く、物類は愈よ滋し。物類は愈よ滋く、天地は愈よ多し。

蓋し苔菌蟲多是餘生なり。餘生は水陸各有り。同じく是れ蟲なりと雖も、一は則ち堅體なり。一は則ち軟體なり。同じく是れ多なりと雖も、一は則ち脚を用い、一は則ち脚を去る。

飛ぶ者は蟲の鳥なり。行く者は蟲の獸なり。飛べば之を蟲と謂う。行けば之を多と謂う。飛中の軟は、蚊蠅の一に屬し、蝶蛾の一に屬す。飛中の堅は、螢螿の一に類し、蝨蝮の一に類す。蚊蠅の屬は、利觜毒尾、蚊と爲し、

蝸と爲し、蜻蛉と爲し、赤卒と爲し、蠅と爲し、虻と爲し、蜂と爲し、果羸と爲す。蝶蛾の屬は、豎羽横羽、豎羽は則ち蝶なり。横羽は則ち蛾なり。蝶蛾は則ち其の品、多種なり。而して人は總じて蝶蛾と名づく。而して好

蜜の蛾、飲露の蟬、將に蛾を出でざらんと爲す。 蠶、 蚌、 豉、 叩頭、 螢類、而して地膽、芫菁、

を爲す。蓋し地の類なり。火は發して質を出れば、則ち能く化を爲す。蓋し天の類なり。火は之を氣中に傳えて益ます熾んに、物は之を質中に潜めて愈いよ蕃る。跡は反して理は一なり。是を以て、鳥獸は氣物なり。艸木は質物なり。水は質を結んで、燥は生を煦し。萬物は由りて以て生ず。燥は居らず。神は守らず。萬物は由りて、以て化す。故を以て、動は神を含みて天中に生化し、植は質を持して地中に生化す。雲雷雨雪は其の上に聚散す。時に有し時に亡す。母も無く子も無し。艸木鳥獸は、其の下に解結す。先後體を換え、生化相繼ぐ。

氣氣は感應し、萬物は變化す。大なる者は感應に跡無し。小なる者は感應に跡有り。蓋し小物は彼此偏立す。而して其の彼此は、或いは物を同くし、或いは物を異にす。物を同くすれば、則ち雌雄牝牡の類なり。物を異にすれば、則ち風雲動植の屬なり。體を接し氣を交すれば、則ち同と異と無く感應を有す。感應すれば則ち變化有り。若し彼を執りて以て此を觀、此に反して以て彼に同じくすること能わずんば、則ち復た通ずること能わず。夫れ天地の間、通ぜざる者莫ければ、則ち感應せざる者無し。我を執りて彼を察せず。佗に病むなり。是を以て、氣相い交われば、感應此に成る。是を以て、氣より質に出没すれば、則ち變幻を幽明の際に於て爲し、質より氣に出没すれば、則ち妖怪を恍惚の中に於て爲す。質を以て氣を動かせば、瓦釜は響を生じ、氣を以て質を動かせば、雷は山嶽を震す。氣を以て質を感じれば、木葉は秋に萎む。質を以て氣に應ずれば、海珠は望に満つ。其の性を變ずれば、則ち米は化して蚌と爲り、楠は變じて石と爲る。其の質を換えれば、則ち蠋は縮みて蛹と爲り、蠶は脱して蛾と爲る。

螺蛤は交わる無く、金石は自から結ぶ。分れて其の道を異にし、合して其の居を同くす。虚なる者は實ならず。動なる者は靜ならず。是を以て、此に有する者は彼に没するなり。是の故に、角を有する者は牙無し。翼を有する者は手無し。孰れか能く之に翼を予えて、以て其の手を奪わん。之に角を予えて、以て其の牙を奪わん。牙は即ち角にして、翼は即ち手なるは、反の常なり。

此に全しと雖も、彼に必ず虧くるなり。一に於て有せられて、而して二に於て反す。故に鳥は羽を以て手に換え、而して羽は還つて身を行るの用を爲す。羽を以て身を行れば、則ち脚は把擲の用を爲す。是に於て、彼は我的手を脚にし、我は彼の脚を手にす。魚は鬣を以て羽に換え、而して鬣は還つて身を行るの用を爲す。鬣は以て身を行れば、則ち尾は還つて守禦の用を爲す。是に於て、魚は鳥の羽を鬣にし、鳥の脚は魚の尾なり。鳥は啄を以て主と爲れば、尿を以て尿に換ゆ。魚は飲を以て主と爲れば、則ち腮を以て鼻と爲す。足ると雖も而も偏せざる所莫し。偏すと雖も而も足らざる所莫し。故に、塊然たる金石、歧然たる鳥獸、彼の無き所、此に充つ。此の乏き所、彼に餘す。二に於て偏なりと雖も、而も一に於て全し。二に於て反すると雖も、而も一に於て足る有り。天地は大なりと雖も、動植は微なりと雖も、此に於て違ふことを獲ざるなり。

氣は聚まりて物を生じ、物は生じて氣を有す。氣は以て生を爲す。之を生と謂う。物は以て體を有す。之を身と謂う。生は本神の氣を有し、身は塊岐の別を有す。動は有意を以て神と爲し、植は無意を以て神と爲す。故に植は冷止無意を以て生と爲し、動は温動有意を以て生と爲す。植は堅立堅剛を以て體と爲し、動は横行柔輒を以て體と爲す。動は氣物なり。地を離れて横行す。牝牡を以て子を生じ、食息を以て身を養う。植は質物なり。地に著きて堅立す。華實は以て種を生ず。水土は以て體を養う。金石は塊然として本氣に富み、生化は攸久にして四紀を没す。螺蛤より龜蟹に至るは、塊然より歧然に漸むなり。艸木は之を堅生に比すれば、則ち歧然として文を爲す。根幹皮肉は、内外本末を具す。

堅植は塊然として、而して金は礦に生ず。玉は璞に抱るれば、則ち漸く内外に生ず。珊瑚樹、石闌干、終に枝幹を爲せば、則ち又た本末を生ず。輒植は歧然として、而して菌は皮肉を没し、寓は本末を没すれば、則ち塊岐相い之く。堅動は塊然として、而して龜蟹は則ち四紀を備う。輒動は歧然として、而して海膽水母、將に其の紀を没せんとす。

鳥獸ちようじゆう は已すでに神氣しんきに富とめば、本末ほんまつ内外ないがい、又また前後ぜんご左右さゆうを多おほくす。是ここを以もつて、文章ぶんしょうの條理じようりは、輒生ぜんせいの歧きに粲然さんぜんたり。
 堅生けんせいの塊かいに暖然あいぜんたり。本氣ほんきなる者ものは天成てんせいにして、以もつて物ぶつの本ほんを爲なす所の氣きなり。神氣しんきなる者ものは神爲しんいにして、以もつて物ぶつの神しんを爲なす所の氣きなり。堅生けんせいと我われと類るいを爲なすこと疏そなり。輒生ぜんせいと我われと類るいを爲なすこと親しんなり。親したしきの故ゆえに、氣きの本ほん神しん、質しつの皮肉ひにくは、我われと同おなじく生生せいせいを種子しゆしに於おいて繼つぐ。同おなじく先後せんごして體たいを換かう。本神皮肉ほんしんひにく同おなじと雖いえども、而しかれども亦また有餘不足ゆうよふそくの相あい反はんする有あり。故ゆえに好惡知辨こうおちべん、彼かれは無意むいを以もつてす。此これは有意ういを以もつてす。生生せいせいの種子しゆしは、彼かれに在ありては實じつと爲なり苗なえと爲なる。此これに在ありては精せいと爲なり子しと爲なる。